

平成 27 年度

西岡小学校 自己評価書

平成 28 年 3 月

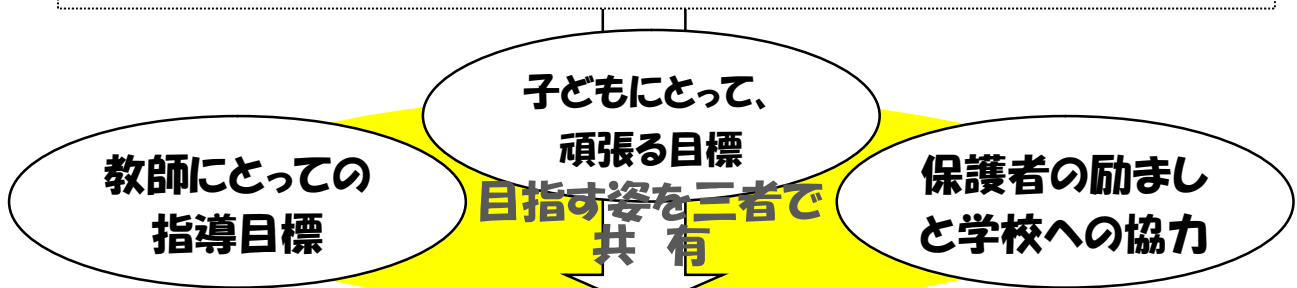
札幌市立西岡小学校

○今年度の重点～めざす学校像～

人との「つながり」を大切に、どの子も「一歩前」へ進む学校

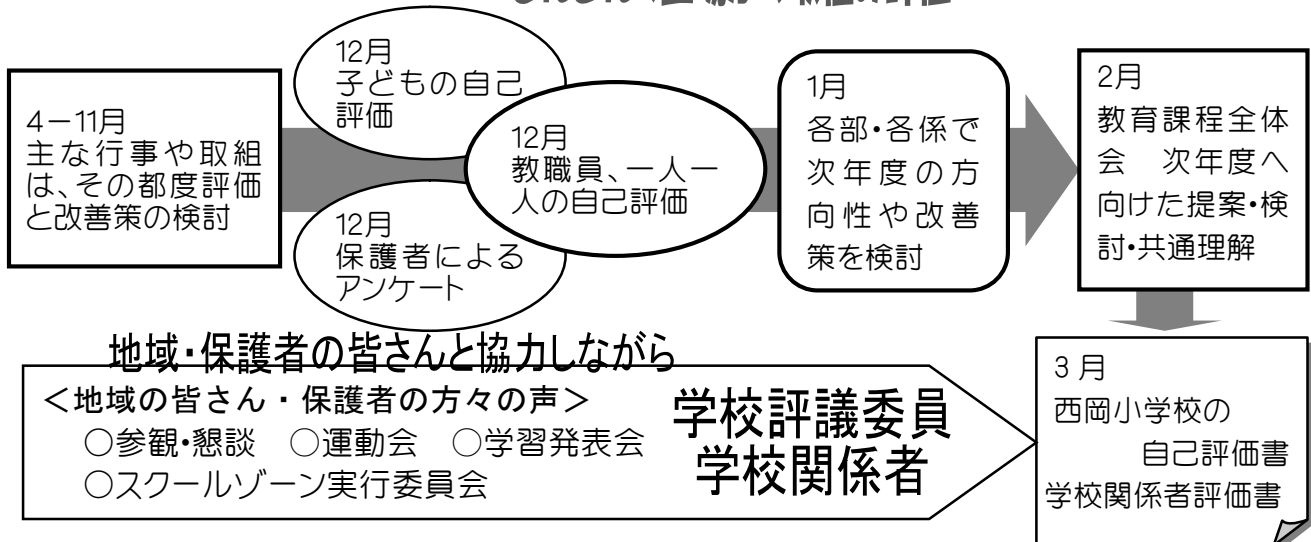
○今年度の重点～めざす子ども像～

かしこい子 やさしい子 たくましい子



○自己評価の流れ

めざす子どもの姿に対し
それぞれの立場から取組み評価



教職員の自己評価を中心に、子どもの自己評価や保護者アンケートを集約分析した上で、西岡小学校の自己評価書を作成する。

◎目標の達成状況を 4 段階で評価

A：十分達成できている B：達成できている C：あまり達成できていない

D：達成できていない

◎今年度の成果と課題を受け、次年度に向けた取組を明らかにしていく。その際、あれもこれもとすることなく、重点化を図ることで教育効果を高めることをねらう。

1. 目指す子どもの姿の評価

	評価項目	評価	H26
かしこい子	友達や先生の話や、反応しながらしっかり聞いている。	B	B
	進んで自分の考えを分かりやすく発表している。	B	B
	自分の思いや考えをノートや作品に工夫して表現している。	B	B
	今まで勉強したこと、生活での出来事、友達の発表などを生かして、自分の考えを深めている。	B	B
やさしい子	学校のきまりや約束を守っている。	B	B
	気持ちの良いあいさつや返事をしている。	B	A
	友達の気持ちを考え、思いやりのある行動をしている。	B	B
	友達のよさを見つけ、仲良く協力して活動している。	B	A
たくましい子	健康や安全に気を付けて生活している。	B	B
	食に対し興味や感謝の気持ちを持ち、好き嫌いをせず食べている。	A	A
	苦手なことにも挑戦し、粘り強く取り組んでいる。	B	B
	進んで外遊びや運動をしている。	A	B

体力増進に向けた取り組みの成果と食への意識の高まり

日々子どもを指導している教師の自己評価であるため、子どもや保護者よりも評価はかなり低い。しかし、これをマイナスにとらえるのではなく、自分や学校の取組と子どもの育ちに課題意識をもっている証拠であると考え。課題意識があるからそこ、自らの指導力を高めつつ、よりよい学校を目指していく

ことができるのではないかと考える。

自己評価が低い項目がある中、「進んで外遊びや運動をしている」にかかわる評価は高い。今年度より始めた「外へ遊びに行こうよ」の取組、逆上がり練習器や竹馬の常設、学級活動部や委員会主催の縄跳び運動の推進など、それぞれの立場でたくましい子の育成へ向け、取り組みを工夫した成果であると考え。また、栄養士を中心とした食育が浸透し、子どもの評価も非常に高い。教職員・子ども・保護者の三者が、目標を共有化することで教育効果が高まっている。

<今後の方向性>

体を鍛えることで
たくましい心を

あいさつを通して
やさしい子を育てる

○保護者アンケートに「いろいろなことに挑戦し、たくましく育ってほしい。」という記述があった。子どもたちの「外遊びや運動」を活性化することは、「心のたくましさ」を育てることにもつながる。

○あいさつを通して、「やさしい子」を育てる取組を重点化する。「おはようございます」のあいさつを大切にしつつ、「ありがとうございます」「お疲れ様」などのあいさつへと発展するよう取り組む。人とのつながり(クラス・学年・教職員・地域の方々)を、常に意識するよう働きかけ、「支えられている自分」への気づきと、「誰かのために頑張る」意欲を大切にしていく。

2. 教育課程・組織・運営の評価

	評価項目	評価	H26
①	めざす学校像「人とのつながりを大切に、どの子どもも一歩前へ進む学校」、めざす子ども像「かしこい子 やさしい子 たくましい子」から目指す子どもの姿を教職員が共有し、それぞれの立場から取り組んでいる。	A	B
②	協同経営体制に基づいた学年経営を行っている。	B	B
③	教職員一人一人の自主性や主体性が生きる職場にしようと取り組んでいる。	B	B
④	校務分掌が適切に機能するよう、仕事内容・責任体制を明確にしている。	B	A
⑤	職員会議や校務部会等の諸会議を効率的に運営している。	A	A
⑥	学校運営のための諸事務作業のデータ化・効率化・合理化を進めている。	A	A
⑦	提案文書等の意を汲み、協働的な取組をしている。	A	B
⑧	教職員の相互理解と信頼関係に基づいた温かい集団を目指し、取り組んでいる。	B	B

会議や校務分掌の 効率化と目的を三 者で共有

教材研究やノートの添削など、子どもにかかわる時間を確保するためには、日常の会議や校務分掌の効率化は欠かせない。提案文書のデータ化や効率的作業を進めるための集計システムや個票データの差し込みなど、今後も大切にしていきたい。

また、今年度は、年度初めから目指す子ども像を全職員で共有するよう取組をスタートさせることができた。子どもや保護者にも共有できるよう取り組んだことの成果は大きい。三者で目的を共有し達成を目指して取り組むことができれば、最大限の教育効果を引き出すことができる。したがって、このような取組を継続し、教師も子どもも保護者も、当たり前感覚になった時、本校の子どもの育ちとして根付くことになると思う。

<今後の方向性>

教師一人一人が
学校づくりにかかわる
自分を役割を果たす

目的が明確であれば
まずは、
やってみようの心意気で
学校改善

- 教職員一人一人が、立場や経験年数などを踏まえた上で、学校づくりの中で自分の果たす役割を考え取り組む姿勢を大切にしていく。特に、若手や中堅が頑張る姿を後押しするベテランの役割は大きい。
- 子どもへの思いや願いなど、教職員一人一人が語り合える場を保障し、素晴らしい取組やアイデアを共有する。授業改善・学校改善につながるものは、積極的に学校としての取組に生かしていく。

3. 学習指導の評価

	評価項目	評価	H26
①	分かる、できる、楽しい学習を工夫している。	B	B
②	体験的・問題解決的な活動を工夫している。	B	B
③	子どもの生活や既習経験を大切にしたい、子ども自ら考える授業を工夫している。	B	B
④	話す・書く・描くなど、子どもの表現力を高める指導を工夫している。	B	B
⑤	TT・少人数指導・学びのサポーターなど、個に応じた指導を工夫している。	A	B
⑥	評価規準や基準を明確にした上で授業に取組、子どもの姿を適切に評価している。	B	B
⑦	子どもの心を揺さぶり、道徳心を育む道徳の時間を工夫している。	B	B
⑧	総合的な学習の時間では、児童の興味・関心を喚起した問題解決的な学習を工夫している。	B	B

3本の全校研と10本の部内研を通して授業力アップを目指した研修

今年度は継続3か年研究の2年目として、研究提案授業1本、3本の全校研と10本の部内研を行った。研究授業を通し、子どもに追求の目的をしっかりとめさせること、具体操作を通して考えることの重要性、学び合いと仲間づくりの不可分な関係性が明らかになったことは大きな成果である。確実に教師一人一人の授業力のアップにつながっていると考える。

<今後の方向性>

**授業を通して
かしこい子
やさしい子
たくましい子
を育てる**

**「～したい」から
「もっと」へと
追求の質を高める
学び合いへの憧れ**

**積極的に
合同授業・交換授業
授業を見合う取組**

専科指導への試行

○日々の授業を通して、かしこい子・やさしい子・たくましい子を育てる。友達の発言を押し量りながら聞こうとするやさしい子。自分との考えの違いを受け入れ、自分を高めるかしこい子、安易に納得することなく「本当の本当を求め」粘り強く追求する子を目指す。

○「考えたい」「話したい」など「～したい」を生む授業を今後も重視。そして、「～したい」から「もっと」へと質を高める学び合いの授業への憧れをもち、研究に取り組んでいく。

○学年で子どもを育てることを大切にしたい。子どもの状況を知るために、そして、互いの指導力を高めるために、授業を見合ったり、交換授業をしたり、合同授業を行ったりすることが大切である。開かれた学級でなければ、学年で子どもを育てること、学校全体で子どもを育てることはできない。したがって、学年主任の役割は、非常に大きい。

○平成29年度の正式運用に向け、担任外の先生の専科の授業への取組を試行しなければならない。

4. 各部の取組の評価

	評価項目	評価	H26
教務部	「めざす子ども像」を担当が評価しやすいように、通知表に「学校の様子」を新設したが、全校的な取組になっていたか。	B	B
	「めざす子ども像」と評価との関連を意識し、子どもが目に見える形で自己評価できるよう「通知表観点の教室掲示」を実施したが有効であったか。	B	
	子どもたちの実態やよい実践を交流し、担任が抱える悩みや解決策を見出すための「プチ交流会」「子どもたちの育ちをふりかえる会」は適切だったか。	B	
研究推進部	教員同士が学び合える部内研・全校研、研究日を設定し、来年度の研究会を見据えた計画性のある研究推進を行うことができたか。	B	B
	部内研・全校研などでの授業実践を通して、成果や課題、学習面での子どもの育ちを研究情報等で周知し、学校全体で共有できたか。	B	
	学校全体の授業力・学級経営力の向上を目指し、教員の困りや必要性に応じた研修を計画、運営できたか。	A	
学校行事部	儀式的行事、運動会、学習発表会等を通して、目的意識を明確にし、子どもが見通しをもち、主体性を育むことのできる活動を構成できたか。	B	A
	運動会、春の遠足、学習発表会等を通して、子どもの願いや発想を生かすと共に、活動の価値づけや意味づけをし、他とあたたかくかかわる力を育むことができたか。	A	
	グラウンド清掃、避難訓練、春の遠足等を通して、活動の意味や喜びを実感し、その場に相応しい態度や行動を身に付けられるよう環境や場の工夫できたか。	B	
学級活動部	挨拶・廊下歩行・清掃に重点を置いた全校指導を計画・実施し、学校生活を、子ども達自身が意識して、より快適なものにしようとする姿を目指すことができたか。	B	A
	学活での給食指導を中心に、毎日の食育放送や給食カレンダーによる全校指導を計画・実施し、食文化や健康に関心をもち、食生活を大切にしようとする姿を目指すことができたか。	A	
	学活での健康・衛生指導や、健康行事を中心に、資料や掲示物等の視覚に訴える教材を積極的に活用した全校指導を計画・実施し、子ども達の心身の健康に対する関心を育むことができたか。	B	
	様々な団体の協力を得て、読み聞かせを充実させるとともに、開放図書館としての学校図書館の運営を円滑に進め、児童の読書活動を推進することができたか。	A	
	目標をもって体力テストに臨めるように配慮し、また外遊びを全校的に奨励して、子ども達の体力・健康増進に貢献することができたか。	A	

児童活動部	ふれあい活動では、各学年の目的意識や役割意識を明確にもてるよう、活動を改善していくことができたか。	A	A
	各委員会、クラブ活動、ふれあい活動で、子どもの願いや発想を生かし、例年の活動を見直していくことができたか。	B	
	委員会活動、クラブ活動、ふれあい活動で、子どもたちの人間関係をより豊かなものになるよう、活動を構成していくことができたか。	B	

目指す子ども像を 意識した工夫した 取組

目指す子ども像の実現に向け、各部がそれぞれの立場から、取組を工夫してきた。目指す子ども像をもとにした通知表の改定、研修を通して授業力を高め、授業を通して子どもを育てる取組、行事ごとに目指す子ども像を重点化した取組、指導のねらいを常に目指す子ども像と関連させ、内容と活動を工夫した

取組、異学年の交流における各学年の役割を明確にし意識化した取組など、これまでの取組を見直し改善してきた。目指す子ども像を共有し、本格的に取り組んだ1年目としては、大きな成果であると考えている。

<今後の方向性>

ニーズに合わせた 研修の充実を

他学年のよさや がんばりを 見つける目 教師も子どもも

○研究部の今年度のまとめにもあったが、目指す授業像や子ども像は、授業研究と学級経営の二つの両輪がかみ合っこそ実現できるものである。しがたって、研究部では授業力アップの研修に重点を置く。一方教務部は、学級学年経営に重点を置いた研修に重点を置くべきである。また、交流会では「テーマは、聞く姿勢を育てる」ということを事前に知らせ、それに向けて取り組んだことを交流するなど、一層の工夫が求められる。先生たちのニーズを敏感に感じ取ることが必要である。併せて、学年研修の充実も欠かせない。

○学年の役割意識をさらに強化すべきである。今年1年間で、ふれあいや行事など様々な場で、自分の学年の役割意識をもつよう働きかけてきたが、一層、大切にしていく必要がある。例えば、全校朝会で、子どもたちは他の学年の頑張りを見つけようとしているだろうか。5年生が、1年生の頑張りを見つけ、1年生に「頑張ったねメッセージ」送ったとしたら。1年生にとっては励みになるし、5年生にとっては、「1年生も頑張っているんだから」と自分を鼓舞することにつながる。各部の取組の多くは、異学年での場が多い。教師自ら他学年の頑張りを見つけ、伝える姿勢が子どもの心を育むことにつながる。教師が範をみせ、子どもに伝える必要がある。学習発表会での他学年へのメッセージはステキな取組である。しかし、残念ながらその取組は、その場で終了の感がある。この取組の意図を日常化していくことが大切である。学年の役割を明確にした上で、他学年から学ぶ姿勢を育み、学年相互に、「あこがれ」と「ありがとう」で結ばれる関係を磨いていく。

5. 教育課程推進会議・特別委員会等の取組の評価

	評価項目	評価	H26
教育課程	ブロック・学年・各部の連絡調整をしながら、教育計画の立案と評価を行い、めざす子ども像実現に必要な計画や実態の把握を行う。	B	B
こども支援	教職員全員が子どもの情報や指導の取組を共有化し、保護者や関係機関と連携しながら、共通の意識で指導している。	A	A
食物アレルギー対応	食物アレルギー児童に対する情報を共有し、適切な対応ができるよう研修を深め、教育的配慮や保護者との連携を持てるようつながりを築く。	A	A
安全安心	集団下校や引取下校を通し、地域や保護者とのつながりを基礎に、安全安心を守る知識や技術を指導する。	A	
学校保健	たくましい子を育てるため必要な指導を行い、保護者や関係医療機関とつながりを持ち、素早い対応ができるよう情報収集を行う。	A	
予算	教育環境の充実をめざし、適切な予算配分と効率的な執行を行い、必要なものを必要な時に活用できるようにする。	A	
教材採択	かしこい子を育てるべく、基礎基本の定着や学習に最適な教材を精選し、系統的につながりのある教材採択を行う。	A	

必要な時に、必要な取組を

こども支援委員会では、各学年で支援を必要とする子どもの現状・支援体制など情報交流を行うことができた。不登校児童をはじめ、問題を抱える子どもについて、担任一人が悩みを抱えることなく、学年・学校体制で子どもの支援にあたることができた。このような体制は、今後も大切にしていきたい。また、メンバーを一新し、各部長が参加するようになった教育課程推進会議では、目指す子ども像の実現に向けて、多くの意見を出し合い話し合うことができた。そして、教育課程員会で話し合ったことを、それぞれの部へもち返り、実践につなげていくという学校づくりの中核になりつつある。

<今後の方向性>

支援が必要な子の情報をみんなで共有

学校づくりの中核を担う意識をもちながら

- 支援を必要とする子どもの情報をもっと共有できるよう、さらなる工夫が必要である。全校で子どもを育てる姿勢が大切であり、その子と日々格闘している担任の先生を支えるためにも、情報を共有化していきたい。
- 教育課程推進会議は、特別委員会とは異なり、各部・学年の上部に位置し、学校づくりの中核を担う分掌である。次年度も、学校や子どもの育ちへの課題意識をしっかりと持ち、校内外の声を広く聞きながら、学校改善に取り組んでいくことが期待される。

6. 保護者・地域との連携の評価

	評価項目	評価	H26
①	各種プリントの発行、ＨＰの更新など、保護者への情報提供が適切に行われている。	B	A
②	「信頼される学校づくり」に向けて、保護者や地域住民から寄せられた意見や要望に対して誠実・丁寧に対応している。	A	A
③	保護者による教育ボランティアや地域の教育力を効果的に活用するなど、共に手を携えて子どもの育ちを育む体制が築かれている。	A	A

保護者や地域との 連携で、子どもを育 てる

保護者アンケートにおいても高い評価を受けている。特に各学年保護者に協力を依頼し教育ボランティアとして参加していただく授業、お話の会・図書ボランティア・等による本の読み聞かせ、札大や平岸高校と連携した協力授業など、地域の教育力を生かした実践は、本校の宝物である。

今後の 方向性

- 地域の教育力を生かす取組の一層の充実を図る。
- 地域の方々や保護者と協力し、安全安心な西岡のまちづくりに学校としての役割を果たしていく。